

## 浄土を求めさせたもの — 『大無量寿経』を読む—

## 第125回(2019.10.15)の要旨

拝読文(『真宗聖典』70~71頁)

仏の言わく、その三つの悪というは、世間の人民、相因り寄り生じて共に天地の間に居す。処年寿命能く幾何なることなし。上に賢明・長者・尊貴・豪富あり。下に貧窮・廝賤・佞劣・愚夫あり。中に不善の人ありて、常に邪悪を懐けり。但し姪姪を念いて煩い胸の中に満てり。愛欲交乱して坐起安からず。貪意守惜して但し唐らに得んことを欲う。細色を眇睐して邪態外に逸に、自らが妻を厭い憎みて、私かに妄りに入出す。家財を費損して、事非法を為す。交結聚會して師を興して相伐つ。攻劫殺戮して強く奪いて不道なり。悪心外きにありて自ら業を修せず。盜竊して趣かに得て、事を繫成せんと欲う。恐熱迫脅して妻子に帰給す。心を恣に意を快くす。身を極めて楽しみを作す。あるいは親屬にして尊卑を避らず。家室・中外、患えてこれを苦しむ。また王法の禁令をも畏れず。かくのごときの悪、人鬼に著さる。日月も照見し神明記識す。かるがゆえに自然の三塗無量の苦惱あり。その中に展転して世世累劫に出ずる期あることなし。解脱を得難し。痛み言うべからず。これを三つの大悪、三つの痛、三つの焼とす。勤苦かくのごとし。たとえば大火の、人の身を焚焼するがごとし。人、能く中にして心一つにし意を制し、身を端しくし行を正しくして、独りもろもろの善を作りて衆悪を為らざれば、身独り度脱して、その福德、度世・上天・泥洹の道を獲。これを三つの大善とするなり。

\*\*\*\*\*

『無量寿経』のいわゆる「五悪段」について読んでおりますが、その第三悪に入ります。「世間の人民、相因り寄り生じて共に天地の間に居す。処年寿命能く幾何なることなし。上に賢明・長者・尊貴・豪富あり」、この「世間の人民」ですが、これは前の第二悪のところにも世間の人民とありましたし、第一悪のところでは諸天人民とありました。この世を生きるあらゆる衆生という意味で「人民」と押さえています。それがこの第三悪では、「相因り寄り生じて」と。「人の間」と書いて人間と言いますが、いわゆる倫理ということが言われるときには、人として生きるということは人の間に生きるということで、人の間に生きる場所にお互いに歩むべき道がある、お互いに守るべき道徳や倫理というものがある。そう教えられるわけですが、ここでも互いによることによって生じてくると。そして共に天地の間に居すと。天と地の間、天と地の間に人間がいるという。天、地、人という言葉があるわけですが、天地の間にいるということが世間の人民がこの世にあるという在り方だと。天地の間にあるだけではなくて、人同士の間柄もちろんあるわけです。

そこにいる人民は寿命があるが、「能く幾何なることなし」とは有限の寿命と言いますか、いつまでも生きていられるわけではない。人と人との間に生まれ落ちて、寿命の間そこに居る。いる場所は天と地の間、人と人との間、そこにいる時間というものが限られてある。こうまず押さえてあるわけですね。そこから「上に賢明・長者・尊貴・豪富あり」、上を見てみると、賢明、これは賢く明るいということで、人間として生きているけれど、その人間の中でたまたま与えられた能力が賢いということ。次に長者というのは中国的な言葉ですけど、そこに生まれ落ちる場所がたまたま豊かとか、与えられた条件が満ち足りたものでお金があったり、資産があったりする。長者というのは生まれ落ちての豊かさがあるというようなことを表す言葉のようですね。そして、「尊貴」。生まれた身分と言いますか、それが尊いという状態の場合に尊貴と言われる。「豪富」も力が与えられてあって、豊か、富んでいるという。上のほうには賢くて豊かさがある、人からは尊敬されるような身分というものがあると。

今度は下を見ると、「下に貧窮・廝賤・佞劣・愚夫あり」と。「貧窮」の貧は貧しさ、窮というのは困窮の窮で困り果てているという状態を表す字のようです。「廝賤」ですが、廝という字は小さいものというような意味をもっている字のようですけれど、何か身分を表すものとして使われる字のようです。昔の言葉の意味として召し使いということが辞書には出ておりましたけれど、廝という字には身分として

長者のような大きな身分ではなくて小さい身分、仕事は主人に仕えるような在り方を表す字です。次の「**佞劣**」は、佞という字が難しい字ですけども、もともと文字の字のできてきたいわれとしては曲がった脛というような、脚が曲がっているような状態を表す文字のようです。その字が弱さを表すわけです。劣というのは劣っているという意味ですから、佞劣ということはこの世を生きている在り方の中でとても生きにくい在り方しかできない、そういう形で生まれ落ちたというようなことを表す言葉のようですね。「愚夫」というのは、先に賢いという字がありましたが、それに対応する字で愚かであると。

上と下というものがまずあるとあって、「**中に不善の人ありて、常に邪悪を懐けり。但し姪姪を念いて煩い胸の中に満てり。愛欲交乱して坐起安からず**」と。「中に」という「中」の字は上中下の中に当たるわけです。どういうわけか上と下を先に出して、そして中に、つまり上と下との間に「不善の人」があると。上と下という優れた状態とひどい状態を出して、真ん中の状態を語ろうと。こう言って、その不善という意味は、常に邪悪を抱くと。邪というのはよこしまという、邪念とか邪悪とか、よくないことを邪と言います。正しさに対する邪。正邪という言葉もあります。よこしまで悪いことを常に抱いている、心に思ってしまうと。さらに煩わしい心で胸中が満ちていると。目が覚めて起きていて思うことと言えば煩悩の心、そういうものが胸の中に満ちていると。私なんか何か思いが起これるとそういうようにしか心が動かないと言いますか、本当に凡夫として生きるということはどうしようもないなど。抑えつけてはいるけれど、常にそういう心が起これるわけです。起きていた時だけではない、夢の中でさえそういうことが起これかねない。

ここに「**愛欲交乱**」ともありますが、男女がお互いにとにかく好き放題してしまう状態を言っている。そういう状態ですから「**坐起安からず**」。「坐起」は座るのも立つのもとういことで、坐起という言葉で生活全体を表しているわけです。座るのも立ち上がるのも不安であると。邪悪が心に起これるということ自身がこの身を痛めつけてきますから生活の中に安らぎがないという。

「**交結聚会して師を興して相伐つ。攻劫殺戮して強く奪いて不道なり**」、**「交結聚会**」とは、交は仲間、交わりというような意味ですし、結は結束という意味でしょう。聚も集まりだし会は会合の会ですから、どちらも人が集まる様を表すわけです。集まってみんなで一緒になるとろくなことは起こさない。何を起こすのか。「**師を興して相伐つ**」とあるように、お互いに相手を非難して戦争を起こして殺し合うと。「**攻劫殺戮**」してとは、攻は攻めるという字です。劫の字も殺すという意味をもっているようですね。攻めて殺す。「**強く奪いて不道なり**」、強く奪うと。つまり強奪するわけです。強奪してくるから、不道というのは道に背く。あつてはならないことを平然としてしまうと。それが人間の歴史ですね。本当にひどい歴史だと思うわけですけど、そういう形で生き延びてきているわけです。

「**悪心外きにありて自ら業を修せず**」、そういう悪業の心が外に現れて、自らが修業をしないと。業を修めない。この業はこの世にあっての行為という意味をもつのでしょうけれど、何か修めるべき事柄を修めない、そういうようなことを表そうとする字のようです。

「**また王法の禁令をも畏れず。かくのごときの悪、人鬼に著さる。日月も照見し神明記識す。かるがゆえに自然の三塗無量の苦惱あり**」、守るべき法律があるのにその禁止令、禁止されていることをも恐れないと。こういう悪業の限りを尽くしてくるような場合には、「**人鬼に著さる**」のだと。人鬼というのは、人と鬼ということでこういう悪業をしていれば人も当然そのことを知っているし記憶するし、鬼という場合には鬼人というような言葉もありますけど、この世の人間からは見えない何か恐ろしいものであり閻魔大王も鬼に入るのでしょうか。そういうものたちがちゃんと見ていて、閻魔帳に記しているのだと。こういうことを人鬼に著さる、著書の著の字を著すと読んでいますね。そこからお日さまもお月さまもちゃんと見ていて、照らして見ているのだと続きますね。「**神明**」とは、神の明るみという字ですが、神通力という言葉もありますけれど、神明ということで人間では見えない何か大きな能力、知恵をもったものも確かに記しているのだと。

そして、こういうことであれば「自然の三塗無量の苦悩あり」と。この自然は業道自然の自然ですね。悪業の限りを尽くしてほしいままに好き放題に楽しんでいたりすれば、そのことはちゃんと見るものは見ている。記すものは記している。三塗とは、地獄、餓鬼、畜生という形で言われる三つの苦悩の在り方ですが、とにかくほしいままに悪業を作れば結果は三途、三悪道に堕ちて無量の苦悩を受けるのだと。

続けて「その中に展転して世世累劫に出ずる期あることなし。解脱を得難し。痛み言うべからず。これを三つの大悪、三つの痛、三つの焼とす。勤苦かくのごとし。たとえば大火の、人の身を焚焼するがごとし」。そういう三塗無量の苦悩の間を展転、生まれ変わり死に変わりして命を繰り返して、「世世累劫に出づる期あることなし」と。「累劫」ということは劫を重ねてもということですね。「劫」とはこの場合は一劫、二劫の劫です。劫＝カルパということですが、カルパという時間概念で無限の時間を表し、譬喩的にいろいろな形で教えられますけれど、とにかくどう数えても数え切れないほど長い時間を表すのだと。それを累劫、劫を重ねると。どこまで時間がたってもこの苦悩の世界から出ていくこと、出る最後というようなことがないのだと。苦悩から解放され抜け出るといえるようなことはほとんどできないと。「痛み言うべからず。これを三つの大悪、三つの痛、三つの焼とす」、これは今の五悪段は「痛」から始まるわけですが、この痛みは心身の痛みと言ってもよいのでしょうか、心の痛みや身の痛みというだけではない何か、存在の痛みといってもよいような痛みでしょうね。そういうものが繰り返して起こると。痛みというのは苦悩の質を痛みという言葉で押さえ直しているのでしょうか、さらに焼は地獄の火というようなことを例えとしていうわけです。激しい火が燃えてくるような火傷のような痛み、そういうことを焼という字で表そうとするわけでしょうね。

「勤苦かくのごとし」、勤苦という言葉で耐え切れない苦しみを表そうとしています。そして、「大火の、人の身を焚焼するがごとし」だと。身近に地獄が起こるといえることです。今ここで見てきた第三の悪も悪業の限りを尽くして、人の間にあって悪をなしていたわけですが、よく五悪については、仁・義・礼・智・信に配当するという言い方がなされる場合がありますが、例えばこの第三悪を「礼」に当てるとすると、礼というのは人間の中の倫理で、倫理的な人間関係というものを礼という言葉で中国語では言うわけです。礼儀の礼ですね。人間の中にあってその礼がない状態。倫理無視とか自分勝手に悪業をなすという在り方です。礼に背く、法に背くということは人間のあるべき在り方に背くわけですから、その結果起こってくる地獄絵と言いますか、そういうことがここで言われてきていると了解することが可能かなと思います。

そういう中であって、「人、能く中にして心を一にし意を制し、身を端しくし行を正しくして」と出てきます。悪業が起こって地獄の苦悩が起こる。五悪段はすべてそうなのですが、その悪業の世界からどこかへ出ていくというのではなくて、そういう人間として生きているという悪業の真っ只中、濁悪世、悪業に満ち満ちているような中であって、しかしそこであって善をなせと。つまり悪業の限りで自分も悪業をなしてしまおうと動くのではない。悪業がある、悪業をもって人間関係が壊されていくということはこの世の常であるといえるか、凡夫としてお互いに生きている中に平和などない、しかしそういう中であって、行いを正していきなさいという教えの立て方ですね。

だから理想郷があってそこに出て行こうというのではない。お互いに濁世を生きている、こういう中であってしかし絶望するのではなく、その中であって生きていこうよと。こういう呼び掛けですね。そこで言われるのが、「能く中にして心を一にし意を制し」。乱れた心に引き込まれるのではなくて、心を一にしていく。この場合の一心は、なかなか意味が深いと思うのですが、前の段にも「一心制意」ということが出てくる。人間として求めるべき心が一心なのだということが言われてくるのでしょうか、なかなか一心がどういう意味なのか難しいわけですが、ここで教えようとする一心とは何か。この場合は心が動かされてしまう、邪念や邪心に動かされてしまうということから離れた一心だと。

こういうことになります。親鸞聖人はそういう心は凡夫は持てないと言われておられるわけですね。凡夫は持てない。その場合どうするのかと。そういう問い方をしてくださっているわけですが、ここではまだあたかもできるがごとくに教えているわけですね。一心になれば。一心を求めよと。

「身を端しくし」、端は端正と仏教用語で言いますけれど、この端という字は正しいという意味をもっているのだと。身を正しくする、行を正しくすると。こう呼び掛ける。あたかも努力すればできるかのごとくに呼び掛ける。それが五悪段の教え方です。

この五悪段というのは矛盾するように見えるけれど、なかなかよく読んでみると悪業から逃げるのではなくて、悪業の中にあってまずは正しい行を求めてみよと。そういう一点突破に求めてみるということなしに、初めから大悲を当てにして生きるというような生きざまはどこかで甘いところがあって自分を許してしまう。自分は罪悪深重であるのだということを見ないで助けて欲しいという。そういう甘え心で如来を信ずるということになりがちである。そこに「**独りもろもろの善を作りて衆悪を為らざれば**」と、まずは本当に独りで生きて道を求めよと。これは厳しいことだなと思いますね。でも独り立ちはできない。もともと人間だからお互いの関係や存在の中にあるのだから、そこから出てきたつもりになるだけであって出てみたところで根ではつながっている。

孤独の楽しみなんてことが言われますけれど、独り本を読む楽しみとか独りになるという試みは、相対的にあり得るわけですが、独りで立ち上がろうとしてみたときに自分は独りではなかったのだということが嫌というほど感じられる。孤独感とか孤立感を逆媒介として、独りではなかったということが教えられる。そういうことがあり得るわけですが、ここではあたかも独立できるがごとくに独り悪をなさない、そして善をなして生きることができるのならば独り度脱できると。独りだけでも助かることができる。そう表現されている。

「**身独り度脱して、その福德、度世・上天・泥洹の道を獲。これを三つの大善とするなり**」、独りでなした福德で度世、世を渡り、上天は死後の天に昇るということを上天というわけです。その次が泥洹。涅槃のことです。この世で人間が求めるものをまずは語って、そういうものを求めるのであれば、悪業に生きては駄目だよということを教えておく。そこから本当に聞くというか、本当に本願を聞くという心に導くということが『無量寿経』の教え方なのかなと思うのですけれどね。ここまでが第三悪です。

私も長い間、何を仰ろうとしているのだらうと。言葉は同じようだけど、まったくレベルの違うことを言おうとしておられるから分からない。レベルの違うことをこの世的な言葉で教えてあるからなおさら分からない。そういう分からなさがあったので、なかなか分かっていただけないと思うのですけれど、しかし我々の五濁を照らしている大きな明るみというのは、ちょうど我々の地球にあって夜が晴れていく明るみが太陽によって与えられるように、本当に闇が苦しい闇だと気がつくときには、それを照らす明るみとして大きな大悲があるということ信じさせられるというか、信じずにおれないということがきっと起きてくるのではないかと。それは親鸞聖人が信じた本願であり、名号であり大悲であるということがようやく少しく領けてきたようなことでございます。

なかなか大悲といっても相対的な慈悲しか我々は分かりませんから、そんな慈悲仰いだってちっとも飯なんか食えないと言われたらその通りだなとも思うわけですよ。でも飯を与えるような、相対的な慈悲が本当の慈悲とは言えない面がある。そういう問題からなかなか人間は脱皮できない。相対的な在り方から脱皮できない。そういうことがどこかで本当に自覚させられるものがこの五悪段だと思うのですよ。五悪段のこんなものは他人事だと思ってしまうと、教えが自分にとって教えにならない。相対性を超えた本願大悲の教えを聞く心が見えてこない。ここがなかなか難しい問題ですね。

編集担当：中村 玲太（親鸞仏教センター囑託）